



ART BOOK THE HIRAMATSU 軽井沢 御代田



田幡浩一の絵画は、圧倒的な画力によって描かれたものに敢えて「ズレ」を与えることで、そのものが持っていた時間の流れや存在した空間の雰囲気鑑賞者に伝えてくれるようです。

筆が置かれた後も、どのようにしたら絵画は生き生きとし続けることができるでしょうか。和訳すると「あの手この手で」を意味する作品タイトルは、どこか可笑しみを誘われます。

田幡浩一 | one way or another (fig)

#02, 2020 | 2020



多数発表しています。

田幡の身近な風景であった果樹や花々、田幡の日常にあるテーブルの上の果物。ありふれたモチーフから独自の表現にいたるふたりの画家の視点へと誘います。

ウジェーヌ・アジェ [Jean-Eugène Atget]

1857年フランス南西部ボルドー近くの村で生まれ、1927年パリにて没。当初俳優を目指して活動を行うも挫折。その後、モンパルナスに住み、当時その地域に多く住む芸術家に資料提供を行い、稼ぎを得るために写真を撮り始めた。以降、30年ほどの間に約8000枚の写真を残した。その作品の多くは、アジェの死後に見出され、今では当時のパリの様子を伝える貴重な資料ともなっている。作品を支えるアジェの視点は高く評価されるにいたり、近代写真の父とも称される。

ダレン・アーモンド [Darren Almond]

1971年イギリス・ウィガン生まれ。ウィンチェスタースクールオブアートを卒業。ロンドンを拠点に活動を行う。フリップ式時計や、月光による長時間露光を用いた写真シリーズなどを通じて、時間の進行に変化を与える作品を発表してきた。北極圏、シベリア、比叡山の秘境など遠隔地に赴き撮影されている。世界の異なる風土、過酷な自然環境と人間生活の現実とに向き合った作品は、様々な国で発表されている。

石塚元太良 [Gentaro Ishizuka]

1977年東京都生まれ。10代の頃から世界を旅行し始め、1999年バックパック旅行の撮影を行った『Worldwidewonderful』でエプソンカラーイメージングコンテスト大賞を受賞。2002年、世界を東回り西回りで2周しながらデジタル画像の位相を撮影した『Worldwidewarp』では、ヴィジュアルアーツフォトアワード、日本写真家協会新人賞を受賞するなど、現代を代表する写真家のひとりとして活躍している。

磯谷博史 [Hirofumi Isoya]

1978年東京都生まれ。東京藝術大学建築科を卒業後、同大学大学院先端芸術表現科および、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジアソシエイトリサーチプログラムで美術を学ぶ。彫刻、写真、ドローイング、それら相互の関わりを通して、認識の一貫性や、統合的な時間感覚を再考している。国内外の展覧会で様々な作品を発表しており、その作品はポンピドゥー・センター（パリ）やサンフランシスコ近代美術館などにもコレクションされている。

植松永次 [Eiji Uematsu]

1949年兵庫県生まれ。リトグラフや絵画作品を制作するなかで、自然の材質に惹かれ、より根源的な作品の在り様を探求した結果、1972年より土の質を確かめることからレリーフの制作を行う。以来、大地と直に繋がる「土」という素材を火を用いて完成させる立体作品を多数制作してきた。1982年に三重県伊賀市丸柱に住居と仕事場を構え、周囲を森林に囲まれた豊かな自然の中で、様々な土の表情を引き出し、作域を広げている。

田窪恭治 [Kyoji Takubo]

1949年愛媛県生まれ。1975年パリ青年ビエンナーレ、1984年ヴェネチア・ビエンナーレに参加するなど、活動初期より国内外で発表を行う。1989年には、フランスのノルマンディー地方に移住。廃墟寸前だった16世紀の礼拝堂を11年かけて再生するプロジェクトに取り組み、完成した「林檎の礼拝堂」は好評を博し、フランス政府から芸術文化勲章オフィシエを授与された。日本に帰国後も様々な「風景芸術」を生み出すプロジェクトを実施している。

田幡浩一 [Kouichi Tabata]

1979年栃木県生まれ。2004年に東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業後、2006年に同大学大学院美術研究科油画専攻を修了。2011年より公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修助成などを得て、現在はベルリンを拠点に活動。動的な要素を含む絵画作品や、絵画的制約をもって構成される映像作品などを制作。近年発表している、絵画に「ずらし」を取り入れることで完成されるシリーズ「one way or another」は、注目を集めている。

三嶋りつ恵 [Ritsue Mishima]

1962年京都府生まれ。1989年にヴェネツィアに移住、2011年には京都にも住まいを構え、二拠点を往復しながら制作を行う。ムラーノ島のガラス職人とのコラボレーションにより、ヴェネツィアン・ガラスの透明度や粘度を活かした、周囲に溶け込みながら光の輪郭を描き出す無色のガラス作品を制作。空気や光を取り込んでその場のエネルギーを表現する作品は、公共空間でのアートワークとしても評価が高く、近年では美術のみならず建築やファッション、デザインとジャンルを横断した活躍が続く。

米田知子 [Tomoko Yoneda]

1965年兵庫県生まれ。1991年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(ロンドン)修士課程修了。以降、ロンドンを拠点に活動を行う。土地や遺物に残された記憶と歴史をテーマに、入念なリサーチに基づき「見えるものと見えないものの間」を明らかにするような写真作品を制作・発表してきた。知識人が生前に使用した眼鏡を通して、その人物にゆかりのある文章や楽譜などを写す「Between Visible and Invisible」は米田の代表的シリーズである。

マン・レイ [Man Ray]

1890年フィラデルフィア生まれ、1976年パリにて没。活動初期はニューヨークを拠点にするが、1921年パリへ移住。シュルレアリスム運動に加わり、写真を中心に、絵画やオブジェ、グラフィック、実験映画など様々な表現手段を通じて才覚を表し、当時を代表するアーティストとして現在も語り継がれている。とりわけ写真作品は極めて高い評価を得ており、歴史的にも貴重なものとなっている。

〔企画〕

KOTARO NUKAGA

磯谷博史

〔デザイン〕

木村稔将

〔撮影〕

坂本理

〔編集〕

「疾駆」編集部

〔短編小説執筆〕

小林エリカ

〔印刷・製本〕

サンエムカラー

〔協力〕

Gallery 38

SCAI THE BATHHOUSE

ShugoArts

White Cube

Yutaka Kikutake Gallery

ZEIT-FOTO SALON

〔設営〕

TRNK